

## 火中の蓮華

王舎城の内には阿闍世王を中心に、貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の炎が高く燃えあがっています。火中に救いを求める韋提希の胸は、すぐ、家庭苦にやつれて血みどろになつて毎日を送らねばならぬ、私どものそれでありました。三毒の炎の中に救いを求むる白道の表われこそ、如来願心のありつたのであります。

世尊は『法華経』の御説法を途中から、この火中に飛びこんで、韋提希の胸に如来の慈悲の涙をおそそぎになりました。そうして空中にあらわれたまう立撮即行の阿弥陀如来を拜ましめたまうのであります。

火の中のみ仏、三毒の炎から逃れようとしてのがれ得ないそのままの内に、み仏の救いによみがえりました。火中そのままの内につき出して来る念仏。火中の蓮華、じーつと目をつぶつて、炎の中の苦しさと、み救いの有り難さと、私は久々ぶりに涙します。

家庭苦にやつれた女はないか。

在家のままの中に生えぬきたまう念仏を、あらゆる女性の胸に浮ばせたい。

家庭苦に苦しむ女はないか。

『涅槃経』に、

「如来、苦を受くれども苦をおぼえず。衆の苦を受くるを見ては己の苦の如し。衆生のために地獄に処するも、苦の想い、及び悔ゆる心を生ぜず。一切衆生各々異りたる苦を受くれど、ことごとく是れ如来一人の苦なり。」

ドロドロと燃え上る火、今にも屋根の落ちんとしている火の中に眠れる子を抱きとるために走りこんだ親を思います。五人でも七人でも、一人一人のために、苦を受けねばならぬ親を思います。

親は子供のために喜んで苦しみます。苦しむことを苦にはいたしません。「あの子のために」それが親の心の全部であります。病む子供の苦しみは、ほつておくことのない出来ぬ親の苦であります。

子供のために苦しむことは、苦でありながら、苦ではありません。強いられて嫌々ながら負うた苦ではありません。天地自然からほとぼしり出た慈悲につき出されたのですから。

衆生のために地獄にいても、苦しい思い、後悔の心が出ないのが親であります。

私の一切から燃え出した火の中に、はつきりと山のように燃える炎が見える。

私の郷里の本立寺が炎上した時、柱一本崩れずに燃えない所は一ヶ所もなく真赤に燃えているのに当面した時、思わず合掌したあの刹那を思う。

あの火の中に、七転八倒しているのが仏なのか。

ああ、私の一切から燃え出した火の中に、如来は立つて燃えたまう。

その火の中に、やがて火にも焼けない蓮華が生えたつ。それが南無阿弥陀仏。

私の罪のありつたけ、如来のご苦勞のありつたけ。  
そうして願行成就のありつたけ、煩惱即菩提。

慈覺大師が越中の立山に登る。炎々として燃え上る炎を見て、

「諸人の罪にかわりて燃え上る

ほのおは弥陀の姿なりけり」

と高く唱えられると、炎の中から声あつて曰く、

「たのみつつ衆生の心すぐなれば

我はほのおに燃えざらましを」

親は終始泣かねばなりません。火中に立つて子のために苦を受けて成就した、そのありつたけを子が受けてくれない時、親は又、泣かねばなりません。信じさすために、すがらすために、まかさすために。

親から子供の魂が離れて行く時、親は子を失うた時であります。

信ずることによつて心と心は結ばれます。

久遠劫来疑うという暗黒の中に生きねばならぬ約束をもつた私どもに、信じさす親の努力は並大抵ではありません。

「たのみつつ衆生の心すぐなれば

我は炎に燃えざらましを」

「燃えざらましを」とは、「燃えないであろうのに」という意です。私の起こす炎の内に又もとびこんで、炎に燃えつつ、私の内に心蓮華を開かすために苦しまねばならぬのです。

たいがいに親を泣かせたがいい。この上、親を泣かせて何としよう。

氣も狂わんほどに待ちかねたもうみ親、私の腹のどん底に、大悲の腹のありつたけが届いて、この炎に狂う私の腹の中の信の世界でなくては、み仏と私の手は握られないとは。

今日のように、足も腰も立たなくなつて、一切自由を失い、寝たきり、動けないほどの大病にならねば、これまで育てたまいし親の恩がわからぬとは。

不孝者でございました。

けれども救わねばおかぬ親の念願は私に強く働きかけて、私の内に、親心を播きつけました。そうして見事、火中に心蓮華は開いて来ました。三毒の火の中から、たつた一口、腹から胸に、胸から頭に、頭から口に南無阿弥陀仏とつき出した時、み親は如何に喜びたもうたであろう。

眼をぎらぎら光らせたまい、

そのおん眼に熱き涙をたたえたまいて、

金色のみ手をあげ、

金口厳かに動かしたまいて、

『末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべし』

逃げる我を撰取して、  
金色の、西方に実在する安養浄土に往生せしめたまう。  
今日も一日、今にも暮れる。  
静かに静かに合掌して涙ぐむ。

## 使命

### 使命

飛行機が勇しく爆音立てて空中に昇れば、一時もとどまることをゆるされぬ。彼はただ進むことをゆるされるばかりである。一時でも停止とまれば落ちねばならぬ。

種子を一粒土地に播けば、彼は芽を切らねばならぬ。もし芽をきらなかつたら彼は腐っている。播かれた種子は芽を出すか腐るかである。芽を切つたならば太らなくてはならぬ。太らなくなつた時、彼は枯れる時である。

光明団。彼は芽を切つて五年、五年間太つて来た。彼の「生きん生きん」と燃え立つ力は、根をはり、枝をのばして来た。彼も育ち太らなくてはならぬ。育たなくなつた時、枯れなくてはならぬ。

光明団。彼は「生きん生きん」と燃えている。育つために根をはり、枝を伸ばしてゆきつつある。

悪魔でもない、聖者でもない、ただの人間、平凡夫が、真実の一道をにらんで突き進んで行こうとする時、行きづまらねばならぬ、そこに必然の結果は、地獄一定の全否定であつた。行きづまつたそのままにすすり泣かねばならぬ者の暗黒は、そのままを救う慈光に接した時、闇は光に変えられねばならなかつた。

そうして再び涙は新しく流れた。更生の涙、感謝の涙、それは生かさせたまうみ親の本願力のありつただけであつた。万人の生かされてある力、久遠劫来、そうして尽末来際、我の本質に触れて、我を生かしたまう力。

その力にゆりおこされて、新しい生涯に出でた者は、必然に結ばれてあつた。然り、必然に生れ出ていたのだ。

生れ出た子の使命は何か。

ああ、光明団の使命は何か。

こう書きかけると、自然に胸は躍る。

使命を語る前に私は次の如く問わねばならぬ。

□日本人には無宗教の国民が多いではないか。無宗教とは文化の低級なことである。

□無宗教は、淑女紳士の恥辱ではないか。宗教を否定したり、無宗教でも何ともないほど魂が物質の中毒を受けているものを、本当の紳士として安心してゆるすことが出来ようか。

□無宗教なほど、真実ということをしらんだことのない人、「真実」と口に言いながら、救いなくして平気でいられるほど魂の麻痺した人が、完全なる人として立ち得るか。

□あなたは、あなたの魂の内にささやきたまうみ仏、救済の泣血のみ声を聞いた事はないか。聞いたことがないほど魂の内なる声を聞くことを忘れているのか。

□あなたはあなたの魂の内に白熱したまうみ仏の大威力、生かききつて下きつてあるみ光を仰いだことはありませんか。この光に育てられながら無自覚であるほど、あなたは大我の生活を忘れている。

□全て真実に二つあるものではない。宗教も、邪教偽教、方便権化の宗教を取ってしまったら、真実と名のつくものはたった一つしかないはずです。そしてそのたった一つの真実宗教はただ真宗だけだということに気づいているか。

私はそれだけを言っておかねばならぬ。

そうして、救われた私たちの使命を考える。

念仏を称えてスタスタと歩む。それで何も解決する。

我々の使命は無言に語られている。

単なる倫理運動の団体でもない。別して功利的の団体でもない。勢力をたよつて無理暴力を振う団体でもない。

我々が無言にらむものは議論の遊戯ではない。冷たい文句の研究でもない。生きた信仰である。生きた信仰によつて結ばれて立つたのである。

光明団にはお世話の中心はいるけれども、皆、同胞で、平等で、権力によつて支配されているのではない。真宗の団体だから、師と弟子ということがない。先き進んだものが、遅れた方の相談相手となる。けれども、師匠と弟子などの関係は毫もない。皆みんな兄弟である。誰も光明団で金儲けする者はない。営利資本ではない。ゆるされた者から、ゆるされた者から先に立つてお世話する。

こうした色彩を持った光明団は、教主を頂き、縦の階級関係のある教団ではない。信ずる者の横なる団結である。何時の時代でも共同団結は力である。念仏の子の団結である。その団結力を持って無宗教の混沌社会にぶつかつて行くのである。如来大悲のお役に立つて、団結の力をもつて、如来大悲を宣伝しようとする。

誰か一人のために出来たものではなくて、一人一人の者がそれぞれに「自分の光明団」と自覚せなければならぬ団体である。

現代、そうだ、全ての機関が、特に真宗宣伝の機関が、至れりつくせりに備わつた現代に、光明団の存在すべき理由があるか。「ありと信ず」と言いきる。そうして、その説明を省き、それに対する考えを次にゆずる。

法兄法師よ。救われた者が、救われない者に働きかける。それはあまりに当たり前ではないか。

「本当のものであるなら宣伝を要しない。自然にはからわれて、宿善開發して弥陀他力の信にいる。」

こう言つてしまえば何も無い。けれども、魂はもつと深い世界に突入して、救われたこのままで独りで喜んでゐるには、あまりに大きな力に動かされてゐるではないか。

「宣伝するにはあまりに自己の醜さを知らない。」

そうだ、あまりに自己を知らない。けれど醜さは、醜さに目覚めて、その上に投げたまう慈光の尊き「このまんま」を救いたもう血に洗われているではないか。

「宣伝しては悪い。」

それすら小さい自分のはからいでしかない。

罪のこのまんまをつき出す力。せねばおられぬ強い念願があまりにはつきり自分をつき動かすではないか。全てこの力に突き動かされた者が血みどろになつて過去地上の文化を作つたのではないか。

釈迦の口を閉じよ。キリストの口を封じよ。孔子も、ソクラテスも、口を緘せよ。親鸞の口、日蓮の獅子吼、山陽の筆、シェイクスピアのペン、それ等をすべて棄てさせて、いつたいあとに何が残る。何も知らず、ただ如来大悲をはつきりと信じ得た庄松同行の一言一句は、今の世の光ではないか。

5

「宣伝によつて、魂が空虚になることが寂しくはないか。」  
小さい人間のはからい、空虚なれば、充されればいい。

かくて光明団は、念仏に救われ、念仏によつて結ばれ、念仏によつて濁流の社会におし出して行く団体である。同心同行の者が互いにふれあつて、不退に信仰生活の向上を樂しむ団体である。団の生命はただ念仏である。念仏による白熱である。切れば血の出る生きた力のなくなつた時、容赦なく改造し、破壊する。

熱

光明団には何が欲しいのか。

曰く、会館。

しかり、会館が欲しい。会館が欲しい。けれども会館よりも、もつと欲しいものがある。地上はあまりに魂のぬけた会館で充ちている。魂のぬけた建物が何になる。建物が要る。けれどもそれよりもつと急いで要るものがある。

金が欲しいか。

金、そうだ、時代は金の力で動く。地獄の沙汰も金次第。けれども、しばしば全ての人も団体も腐敗してくるもとは金である。金は欲しい。けれども金よりも先に欲しいものがある。

努力家か。えらい肩書のある方か。

いいえ。いいえ。事業する時、発展する時、努力家や肩書ある方があればどんなに便利かも知れぬ。大きいことが出来るかも知れぬ。けれども私たちは単にそれだけでは足らぬ。一文不知の老女の中にすら見出せるある力を求める。

肩書を頼りにしていたこともあった。学力を頼りにしていたこともあった。金満家だから頼りにしていたこともあった。けれども「すわ鎌倉」という時、それだけでは力ではなかった。

道を歩いていた。畑の中に立って仕事しているおじいさんと会った。互いに見合わず顔と顔、その間に流れる無言の千言万言。どちらの眼にも浮んで来る涙。おお、その涙。その熱い熱い無言の涙。その涙の光るその奥に見えている深い深い力。その力によつておこされた熱。私はその熱を欲する。

熱のない者よ、世間体と義理とのために先頭にとどまってはならぬ。皆が行くことを妨げる。

飯室の天地にみなぎる熱を思う。

夜、雨の中を一里二里と行つても何ともない熱を思う。

月の夜、

峠の中、

別れてゆく一隊が高唱する団歌が松並木の間に消えて行く。

その後に残る余韻にふくむ熱がなつかしい。

「信心の酔いのまわるものは五種正行の舞いをまう。」

世の中は「のぼせた」と言うであろう。「狂気だ」と言うだろう。けれども何故にもつと酔いのまわつた狂気者が出来ないのだろう。何と言われたとて平気で歩める熱烈さがほしい。女でもいい、男でもいい。学問はなくてもいい。身代はなくてもいい。夾雑物なしに大悲に白熱した人がほしい。

私は常に、国のおきてをもつて念仏が禁じられてあつた薩摩の同行の熱を味わう。時には念仏の村が数十戸も一度に焼かれた。時には隠れて本願寺参詣をした者が打ち首になつた。けれども薩摩の法難の中に生きた妙好人たちは、あるいは山に隠れ、物置にひそんで、如来大悲を讃仰した。番役と称する人たちは声をひそめ、涙をのんで、人から人にお慈悲を伝えた。

慶長年間から明治まで三百年、三百年の間、法灯を社会の裏につないだ力は、ただの冷たい知識からではなかった。骸骨のような議論ではなかった。生きた信仰から、ほとぼしり出る熱であつた。

本当の熱のある時、建物は何だつていいではないか。たとえ天を突く楼閣だつて、集まる人を失つた時、それはただ廃虚である。主人を失つたあの寂しい天主閣とどこがちがうのだ。天主閣は、歌や詩の材料ではあつても、今の世の力ではない。吉田松

陰の、皇国を憂い、時勢憤慨の熱で動いていた、あのわずか二間の松下村塾からは、天下を動かす力が出たではないか。

荒んで行く社会を見て、狂い出る熱の子はないか。わずかに老人によつて保れている真宗の現状を見て、飛び出してくる熱の子はないか。生活や衣食を気づかうことなしに、みんな大悲にまかせきつて、悠悠濁乱の社会の裏をつきすすむことの出来るゆるされた念仏の行者はないか。

私の頭には。もつと強さを、もつと熱を求めている。とにかく、議論なしに熱を求めている。何時の時代でも、熱のある者のみに新しい舞台が与えられる。私は悲観しない。如来の智慧光に白熱したまう諸法兄弟を頭に描いて、次から次と指を折つてみる。三人、五人、十人、そうだ、十人あれば足りる。熱のある者は五人前出来る、十人前出来る、百人前出来る。「出来るものかい」と議論に日を暮す人よりも、黙つて立つて熱で行く人が何かをやる。

熱の世界は輝いている。燃えている。動いている。何かを常に建設している。あの意味において世界の全ての文明文化は熱の人によつて造られたのだ。地上から過去の熱の人を除いたら何という淋しい事になるだろう。しかも熱の人は何時の時代でも狂者と見られた。彼等は自己の道を他人によつて定めようとせなんだからである。生一本に、熱情に生きた。時々に応じて、風の吹きまわしで、いい加減に生きなかつた。道はたつた一筋であつた。自分の損になる時も道を変えなかつた。命を棄てねばならぬ時でも道を変えなかつた。唯、進む一方だつた。

一人の人が生一本に生きて行く時、きつと凡人が寄つてたかつて引き落すことに力をそそぐ。たいがい平凡線に引き落される。時々それをうんと突き放して突破する者がある。突破して無碍の道味を味わつた者はうなずける。引き落して平凡線にとどまらせようとする力は、常に自分の力よりは弱いものだ。

味わい方を違えて言えば、行く手はるかに大波が見える。たいがいはその波を見て行かれないものと決定する。熱の子は、その大波に突き当たる。突き当たつたその瞬間に、その波は消えている。

行手遠かに、大山が見える。議論の子は、大山を議論の種にして進もうとしない。熱の子は、すぐその大山に歩み続ける。歩むことそれ自身が問題である。大山につきあたるその一瞬間、大山は消えている。

かくして熱の子は、幾度でも試練に向かつては突進する。私にはその力はない。けれども私には、大悲白熱の力がある。無碍の一道を進ませられている。そこには何の碍りもない。行くところ、何物も碎けているはずである。

頭では誰でも知っている。それのにどうしたのか出来ない。そこには足りないものがある。熱である。私は熱を愛する。熱の人を求める。熱のない大学出より、熱のある小学校しか卒業しない青年に大きい事が出来る。

重ねて言う。熱とは涙もろい性癖を言うのではない。線香花火のようにパツとする人でもない。如何なる苦しさとも戦つて行く、底力のある人である。小さい事にすぐ動揺しない人である。熱心な人である。熱烈な人である。「その速きこと風の如く、

その静かなること林の如く、侵略すること火の如く、動かざること山の如き」人である。

熱の人を要求する。

熱の人のみに全てを解決する秘密の鍵が渡されてある。

無言の歩み

色々な理由によつて、色々な意味において、苦しい迫害と非難とを受けて、血みどろになつて歩みを続けている法兄法妹に、心からなる同情を捧げます。けれども私は愛する同朋の胸に送らねばならぬことがあまりに多い。

(一) 人より一歩進んで歩む者は、きつとおくれたものの攻撃を受ける。

新しく純真なる魂の念願によつて生れ出たものには、新しい生命が流れる。けれども何でも時がたつと、熱がなくなつて、生命が枯れて、形だけが残る。形や型ばかりが残ると、今度はその型の中に人を入れて型にはめようとする。けれども人は何時までも型にはめられていることが出来なくなる。聖親鸞は叡山南都の宗教がただ形ばかりを残して生命の枯れたものであることに気づいた時、山をけて生命をたづねて出て行つた。

叡山も南都も、ただ經典の研究や、外見は僧侶でありつつも、あるいは僧兵となつて荒れまわり、戒禁を破つて女色に耽つた。そうして、ただ既成宗教は現世祈祷に墮落した。

「かなしきかなや道俗の

良時吉日えらばしめ

天神地祇をあがめつゝ

卜占祭祀つとめとす。

五濁邪惡のしるしには

僧ぞ法師という御名を

奴婢僕使になづけてぞ

いやしきものときだめたる。」

五濁悪世のしるしに、僧とか法師とか三宝の一つに数えられる尊き名を、坊主とか尼とか称えて、人に使われる奴婢僕使に言つてしまふ有様だつた。

「仏法あなづるしるしには

比丘比丘尼を奴婢として

法師僧徒のたふとさも

僕従もの名としたり。」

こうした有様は今の世にはないか。僧侶の尊嚴は失われ、僧侶の生活は墮落し、生命のぬけた殻が残つて、わずかに権勢を徒党にたのみ、存在を祈祷につないでいる既成宗教に、何で真実の一道を歩みつけようとする聖親鸞の魂がながれたらう。ここに一切の殻を破り、化城を棄てて、生命を求めて進んで行かれた。

何時の時代でも、今までの殻を破つて、新しい型に自己を生かしたものは、きつと非難と攻撃の的でなければならなかつた。

(二) 光明団は不必要か。

私は答えに苦しむ。必要かも知れぬ、不必要かも知れぬ。ただ、私たちは結ばれることを強く念願する。何のやましい心もなく、理由もなく、大きく育てたいと念願する。強い念願の前には、何ものをも突き破つて行く力がある。念願に生ききらねば、この自分の燃ゆる魂をどうすることも出来ぬ。

「光明団はいらぬもの」とか、何とかかとか、その批難を謹んで傾聴する。そうしてもし私の魂に「さては」とうなずくほど、道理の上から教えらるるなれば、何時でもやめる。又悪い所があれば容赦なく改造して行く。けれども、批難のための批難、攻撃のための攻撃、感情上の反対ならば、私は、戦うことなく、言いわけすることなく、無言に歩む。

ただ一つ考えておかねばならぬことがある。それははつきりとある念願が若い魂の上に主観となつて表われるということは、それがすぐ時代というものの力であることだ。「時代が生む」、そこに自然のはからいがある。時代が要求しない時、決してそれを入れる余地はないはずである。私たちは、もつと深く次のことだけは考えておかねばならぬ。

私にとつては、光明団が太くなるか、小さくなるか、それは一向に關するところではない。もし、如来聖人のみ胸にかなわぬ時、生れるものではない。生れたとて大きくなるものでない。何時でも、魂の消えた、光のなくなった廃虚は亡ばねばならなかつた。

力強く言いきる。

もし大悲のみ胸にかなうなれば存在せしめたまえ。

もし、み親のみ心になわぬ時、きつと亡びゆくであろう。

「仏法は無我にて候」

よし大きく育つたとて、我が名譽でもなければ、あとかたなく亡んだとて、不名譽でもない。その結果を問うことなく、一切の予想を高く築くことなく、ただ、魂の念願なるが故に、一道を見つめて生ききらねばならぬ。そうだ、生ききらねばならぬ。結果はもとより考えるところではない。

非難する者があつたなら、信心決定の人であるか、いい加減に世の中を渡る人であるかを考えて見る。いい加減な人や、何かえらいものを持つている方であるなら、よく言われないことがほんとはである。謹んで、喜んで、黙つて、ただ一つの光を目あてに進んだらいい。もし、心から親切に教える人があるならば、謹んで喜んで、教えを受けて進めばいい。

もし、それ、新しき道を歩む者は苦しいけれど、意義のある緊張した生活をせねばならぬことは言うを待たないことである。苦しく生きることのそれは、時によつて人の子の求めねばならぬことである。

「豚となつて安らかなのがよいか

仏となつて苦しいのがよいか」

もし、目覚めたる人であるならば、苦は問題ではなくて、真実の生活こそ問題でなければならぬ。何も求めることなく迷いの生活を続けている者から、批難されたり、迫害されたりすることは、よく考えて、しこうしてニツコリと微笑んでもいい。

苦しくてもいい、楽しくてもいい。

如来大悲は時に、苦樂を超越せしめたまう。

行こう行こう、無言に行かう。

「憂患に生き、安樂に死す。」

それが我々の本望である。

かつて狂者によつて持たれた三毒の利劍は、今や、大悲のみ手にもたれてある。

忘れてはならない。

何を。

今日一日の歩みはみ仏によつて生かされてあることを。

今日も念仏はあつたか。

そこには善惡をとびこえた絶対自由の世界がある。ここを歩む。

ただ、自分が行じながらも、自分のはからいが無い故に非行と言ひ、我、称えるに似たれども我がはからいにて称えるのでないが故に非善という。

非行非善の第三世界を、み親によつてつき出されて、一時もとどまることなく、永劫のかなたに進み続ける。

心はいつしか大悲の温きささやきによつて充つ。

ただ、南無阿弥陀仏。

### (三) 無言の歩み

大小の批難攻撃に対して、二つのとるべき道がある。

一つは一切の批難攻撃誤解に対して一一に言いわけをして通る行き方である。批難には弁解を用い、攻撃には攻撃を以つて報い、誤解には釈明をもつてするのである。この行き方もよい。口には口をもつて、腕力には腕力をもつて行くのである。

いま一つは、一切の批難、攻撃、誤解に対して、ただ無言に歩む行き方である。単なる無抵抗主義でもない。

無抵抗主義とは、お金を取るものには取るにまかせ、たたくものにはたたかせ、切るものには切らせ、全て忍んで、苦しんで、何にも、誰にもはむかうことなく、なすにまかす聖者の道である。これを言うのでもない。

無言に歩むとは、世を恐れ、人を恐れて、神経質の人のように、心でくよくよ思いながら、泣き寝入り式に、残念遺恨を胸にたたんで、世をおそれ、社会をおそれ、人の学力、地位、金力におそれ、ただ黙つてしまふ卑屈者になれと言ふのでもない。

無言に歩むのである。無言に止まるのではない。口を封じて一道に精進するのである。人を相手としないで、み仏を相手とするのである。念仏を称えて、み仏と共に、ニツコと笑つて白道の無碍の味を体験するのである。真実の一道をはつきり見つけて、真実の一本道を生きるのである。

真実の一道とは、念仏を信ずることである。念仏を信ずることそれ自身が絶対善である。真実の一道である。念仏の子が念仏を称えて、貪瞋の煩惱の中に湧き出す、消そうにも消されない、止めようにも止められない念願のままに念仏と共に歩むのである。「念仏と共に。」その五字が一切の解決である。

我が苦しむ時、衆生苦惱我苦惱、如来は共に泣きたまう。

我がほほえむ時、衆生安樂我安樂、如来は共に笑みたまう。

我は善悪の二字を知らないけれど、み仏のみ善悪を絶対に知りたまう。

そのみ仏のみ心にふれる時、何もいらぬ。批難、攻撃、誤解を一一に相手にしているほど心に暇があろうか、すぎがあろうか、み仏のみ心に直入すれば、そこに一切の間にあわぬ、一切の用のない、無言に進み得る別の世界がある。

無抵抗の聖者の道でもない。あきらめでもない。泣き寝入りでもない。全くの別の世界である。無言のままに、叫びたければ、誰をも恐れず叫ぶのである。行きたければ誰はばからず行くのである。

言いたいものには言わしておけ。それに関わっているよりは、もつと忙しいうことがあある。笑うものには笑わせておけ。それを気にしているよりはもつと忙しいうことがある。

他人のことではない。自分の魂の問題がそれよりもつと忙しいではないか。盗賊が盗賊を嘲笑う、それが世の中の自分を一度も見ない人の様ではないか。私たちのように、現に罪悪生死の凡夫、眩劫より己来迷い続けている者にとつては、一切があまりに大事ではないか。何も言っている暇がないではないか。そして、愛せねばならぬ隣人の大方は、まだ、何も知らずに、火宅無常の世界でそらごとたわごとをなしつつけているのではないか。

あまりに時間がたつのが早い。あまりに日が暮れるのが早い。寝ていたら誰もたづねては来ないではないか。それに私たちの命はあんまり短い。全てがなまぬるいなまぬるい。道端の暇な人間のいらぬ口にかかわつて、止まっつてはならぬ。ただ信ずる一道を無言に歩むのだ。町も、里も、山奥も、念仏の道場は荒れている。若い者が奮い立たねばいつたいたいどうなるのだ。

止まるのではない。

歩むのだ。

無言に止まるのではない。

無言に微笑んで歩むのだ。

進むのだ。

## 別れの苦悩

七月二十一日、それはく、悲しい一日でありました。愛された人たちと別れて出て来る日でした。すぐ会うとは知りつつも、学校の人としての最後、多くの人たちの涙の深刻さ。一生涯にあれほど辛いことはあるまいと思われるほどの苦しきでした。

子供、青年団、処女会員、父兄に合掌して、自動車に入れば、後には微に慟哭の聲が聞えています。それが最後でした。魂のどん低からゆりおこされるような苦しきに出会った時、感謝も出来ませぬ、諦めもだめです。苦しきものが潮のようにおしかけます。そうした念仏をとり忘れた人間裸形の時の私こそ如来本願の目あてであります。